

# 崖の上で踊る

石持浅海

第七回

## 第四章 犯人捜し

「亜麻音さん」

雨森あめしりが話しかけた。優しげに、気遣きづかうように。「今から昼食にしよ  
うかって話してたんだけど、どう？」

亜麻音は、雨森の方を見もしなかった。

「けっこうです」

「それは、自分は食べないけど、みんなは食べてもいいって意味な  
のかな」

今度は返事をしなかった。逆に、雨森の方を見た。はっきりとし

た、怒りの表情が浮かんでいる。わかりやすい表情。この非常時に、呑気のんきに飯などと言っているのか——怒りに燃える双眸そうぼうが、そう語っている。

「お好きに」つっけんどんに答える。「ただ、わたしなら、容疑者をキッチンになんか行かせませんけど。武器になる刃物がたくさんありますから」

全員が、反射的にキッチンの方を見る。そういえば一橋いちばしも吉崎よしざきも菊野きくのも、キッチンにあったと思われるアイスピックやナイフで刺殺されている。

食堂に重い空気が流れた。誰が犯人かを考えようとしたとき、江角えかくが亜麻音犯人説を唱えた。残ったメンバーのうち、亜麻音だけがフジンブレードに恨みを抱いていない。いわば外様とさまだから、彼女が犯人であれば、ある意味安心できる。そんな暗黙の了解の下、菊野の部屋が調べられた。毛髪にこだわっていた千里ちさとだって、おそらくは茶色い亜麻音の毛を探していたのだ。

しかし亜麻音が犯人である証拠は見つからなかった。もちろん、それで亜麻音が容疑者はすから外れたわけではない。それでも全員が犯人候補である事実を、あらためて見せつけられることになった。亜麻音の指摘は、内心の不安を見事にヒットしたのだ。

「なるほど。そんな考えもあるか」

ややわざとらしい仕草で、雨森が感心してみせた。「じゃあ、昨日みたいに二、三人が一組になって行動するってのは？」

亜麻音が軽蔑けいべつするような目で雨森を見た。

「キッチンでいきなり刃物を振り回されたら、防げるんですか？」

「自信はないね。まな板で防御しようか」

雨森が真面目まじめな顔で答えた。本人にからかうつもりはなかったのだろうけれど、亜麻音は眉間みけんにしわを寄せた。

「自信がないのなら、やめておいた方がいいと思いますけど」

「そうだね」静かに言って、雨森は亜麻音を見つめた。正面から目が合い、亜麻音が戸惑った顔をする。

「亜麻音さん。君は『誰が、吉崎さんをあんなふうにしたんですか？』と言った。犯人捜しをしたいわけだ。だったら、その前に答えてほしいことがある。全員きんに訊いたことだ」

「……なんです？」

雨森は指を二本立てた。

「質問はふたつある。ひとつは、まだフウジンブレードへの復讐ふくしゅうを続けるかどうか。もうひとつは、昨晚何をしていたか」

亜麻音がわずかにのけぞった。それもそうだろう。亜麻音は戦闘態勢を整えて、食堂に下りてきた。仲間を追及する気満々でいたのに、いきなり質問を浴びせられた。彼女の感覚では、先制攻撃を食

らったようなものだ。

しかし亜麻音は、すぐに体勢を立て直した。

「みなさんは、どうなんですか？ 少なくともフウジンブレードへの復讐については、動機を持っているのはあなた方です。吉崎さんとわたしは、お手伝いしているだけですから」

「うん」雨森は問いに問いを返されることを予想していたようだ。

すぐに答えた。

「全員一致で、復讐継続を決めたよ。ついでに、みんなの行動を教えておこう」

雨森は先ほど話した、昨晚解散してから、翌朝食堂に下りてくるまでの自分の行動を、亜麻音に伝えた。そして絵麻えまに目で合図する。絵麻もまた、自分の行動をあらためて口にした。反時計回りで亜麻音に報告する。

最後の沙月さつきが話し終えると、雨森がバトンを受け取った。

「というわけなんだ。もちろん自己申告だ。みんなの主張が正しいかどうか、わからない。誰もが本当のことを言っていると仮定すると、亜麻音さんしか犯人がいなくなってしまう。だから、君の行動を訊きたい。昨晚君は、何をしていた？」

「シャワーを浴びて、すぐに寝ました。さすがに疲れてたのか、絵麻さんに起こされるまで、一度も目が覚めませんでした」

亜麻音はそう答えた。江角が口を開きかけ、再び閉ざした。

おそらく江角は「吉崎さんの部屋に行ったんじゃないのか。ベッドを共にするために」と訊きたかったのだろう。しかし、さすがにひどいもの言いになると思ったのか、自制したようだ。正しい判断だ。二人の間に肉體関係以上の絆きずながあつたかどうかはわからないが、少なくとも身体からだを許す程の相手を、亜麻音は失っている。

雨森は小さくうなづく。

「わかった。全員が部屋を出ていないらしい。ということは、誰かが嘘うそをついているということだ。でも、そのことを考えるのは、後でいい。もうひとつの答えはどうか。君は今、自分は手伝っているだけだと言った。吉崎さんが亡くなった今、手伝いはやめるかい？」

テーブルに緊張が走る。もし亜麻音が復讐の手伝いをやめてここを出ていくと言いだしたら、口封じを考えなければならぬ。

亜麻音は首を振った。

「吉崎さんは、最後までお手伝いするつもりでした。中道なかみちと西山にしやまを殺すまでが、自分の仕事だと。吉崎さんが亡くなったから途中でやめるというのでは、無責任すぎます。みなさんがやめないというのであれば、わたしも最後までお手伝いします」

ふうっと緊張がほぐれかける。しかし亜麻音は言葉を続けた。

「でもそれは、吉崎さんを殺した犯人を突き止めてからです。犯人と行動を共にはできません」

亜麻音は年上の仲間たちを睨めつけた。

「吉崎さんは、計画遂行に最も頼りになる人でした。その吉崎さんを殺したということは、犯人はみなさんの復讐を妨害しようとするんでしょう。犯人を突き止めて排除してからでなければ、復讐なんてうまくいきつこありませんから」

雨森と同じことを言った。同意見だったためか、雨森が目を細める。

「賛成だ。では、犯人はこれからも僕たちを狙うと思う？ 復讐しようとする奴がいなくなるまで」

亜麻音は軽く首を傾げた。

「さあ、どうでしょうか。吉崎さんを殺してしまえば、もう用は足りたと思ってるかもしれません」

聞きようによっては、大変失礼な発言だ。吉崎以外には、作戦遂行能力がないと言っているも同じだからだ。精緻な計画を提案したのは、吉崎でなく雨森の方なのに。

「そうかもしれないな」雨森は優しく言った。「でも、違うと思う。

亜麻音さんは、この場に菊野さんがいないことに気づかなかつた？」

亜麻音が虚を突かれたような顔をした。あらためて周囲を見回す。どうやら、菊野の不在に、気づきもしなかったようだ。いかに亜麻音が菊野を軽視していたかが想像できる。確かに優柔不断なところや瞳ひとみに甘えるようなところはあつたけれど、若くて肉体的には頑健だったのに。

「……菊野さんは、どうされたんですか？」

「殺されたよ」

雨森の答えは短かった。亜麻音が息を呑むの。

「吉崎さんの遺体を見て、君は気を失った。僕たちはあの後、菊野さんの様子も確認したんだ。菊野さんは、自分の部屋で死んでいた。吉崎さんと同じペティナイフが使われていた。犯人は、昨晚二人を殺したんだ。吉崎さんさえ殺せば目的を達成できるとは、考えていなかったらしい」

その後江角が亜麻音犯人説を打ち出し、証拠を求めて菊野の部屋を搜索したことはない触れなかった。

「……………」

亜麻音は黙り込んだ。菊野が殺された意味。それを懸命に考えているように見えた。

「そんなことが、あつたんですか……」

「そう。だから僕たちは、復讐を止めようとする犯人が、復讐した

がっている僕たち全員を殺すんじゃないかとさえ疑っている。たった今確認したように、僕たちは全員が復讐継続に賛成している。復讐を止めるためには、全員を殺すしかないからね」

つまり、君も狙われているよ——雨森は言外に匂わせた。亜麻音に通じたのかどうか、わからない。少なくとも、目の前の女子大生は怖じ気づいたようには見えなかった。

「わかりました。そんな状況なら、一刻の猶予もありませんね。早く犯人を見つけないければ」

亜麻音はようやく紅茶に口をつけた。少し冷めていたためか、一気にカップ半分を飲んだ。前を向く。

吉崎が座っていたのは、窓を背にした中央だった。場の中心になるのにふさわしい席。亜麻音はその隣だ。従って、今は亜麻音が場の中心に近い。あらためてテーブルをぐるりと見回した。

「わたしは犯人ではありません。ですから、みなさん全員が容疑者ということになります。あらためて伺います。どなたが吉崎さんを刺したんですか？」

あまりにもストレートな問いかけ。犯人が名乗り出るわけがないではないか。自室を出て吉崎や菊野を殺害したのに、自室を出ていないと言いつ切っているのだから。

「普通なら雨森辺りが「僕たちにとっては、君も容疑者の一人だ



よ」と反論するところだ。けれど雨森は真剣な表情を返しただけだった。

「あらためて言うけど、僕たちには、捜査の手段がない」

まっすぐに亜麻音を見て、そう言った。「菊野さんの部屋に遺留品がないかどうか、全員で探してみた。でも何も出てこなかった。吉崎さんの部屋は見えていないけれど、おそらく同様だろう。素人のやることには、限界がある」

「確かに、鑑識がいるわけじゃありませんからね」亜麻音は同意した。「でも、放っておくわけにはいきません」

「賛成だ」雨森はここで視線を亜麻音から外した。全員を等分に見る。「犯人の行動を考えてみようか。吉崎さんと菊野さんのどちらを先に殺したのかは、わからない。とりあえず吉崎さんを先に殺したと仮定しよう。犯人は自分の部屋を出て、吉崎さんの部屋を訪ねた」

それはそうだ。吉崎は自分の部屋で殺害されているのだから。どうしてそんな当たり前のことをわざわざ言うのだろう——そう思っていたら、雨森がその理由を口にした。

「ここで問題になるのが、客室はオートロックだということだ。管理人室には合鍵がある。一橋さんの部屋に入る際に使ったから、その存在は全員が知っている。では、犯人は合鍵を使って入ったんだ

ろうか」

「あり得ないですね」

亜麻音が否定した。「何時のことかわかりませんが、合鍵で中に入ったときに、吉崎さんが起きていたら、大騒ぎになります。それから、チェーンロックもあります。吉崎さんはいつも、部屋にいるときにはチェーンロックをかけていました。仮に吉崎さんが眠っていたとしても、合鍵で部屋に入れるはずがないんです」

「そう思う」きつちり答えてくれたからか、雨森が満足そうな顔をした。「じゃあ、犯人はどうやって入ったんだろう」

「そりゃ、吉崎さんに入れてもらったんだろう」江角が亜麻音の方をちらちら見ながら答える。「一橋さん殺しを復讐の一貫だと解説したのは、吉崎さん自身だ。犯人は敵じゃないと言ったのも、吉崎さん。これ以上事件が起きるとは、まさか考えない。ノックしたら、相手が誰であつても、中に入れてくれるだろう」

最も怪しまれずに入れるのは亜麻音。そんな頭があるのか、逆に「誰であつても」を強調したように聞こえた。

「そうでしょうね」沙月が納得顔をした。「いくら殺人経験が豊富な吉崎さんでも、仲間とと思っていた人間にいきなり襲われたら、ひとたまりもなかったんだと思う。部屋には格闘の跡なんてなかったか

「し

亜麻音はコメントしなかったけれど、表情は不満げだった。沙月の発言が気に障ったというより、全幅の信頼を置いていた古崎が、他者の手にあっさりかかってしまった事実に対して不満を抱いているように見える。

「おそらくは、そんなところだ」雨森がまとめた。「菊野さんも同じような感じだろうね」

「そう思う」千里が簡単にコメントした。「同じことを二回繰り返したと考えた方がいいよね」

「ということは、菊野さん殺しもまた、誰にでもできた」  
「そう」

千里が口を閉じると、食堂に沈黙が落ちた。

犯人を見つけなければならぬのに、見つける方法がない。手持ちの情報だけでは、一人たりとも除外できない。これでは、どうしようもないではないか。

絶望しかけて、ふと気づいたことがあった。先ほどの、雨森と亜麻音のやりとり。昼食を作りキッチンに入るかどうか話をしていたときに考えたことが、頭に甦よみがえってきたのだ。

「一橋さん」

思わずそうつぶやいていた。ぴくりと千里が反応する。

全員の視線が絵麻に集まる。まだ考えは全然まとまっていないけ

れど、ひと言発してしまった以上、話さなければならぬ。

「えっと、一橋さんを殺した犯人と、吉崎さんや菊野さんを殺した犯人は、同じじゃないのかな」

「同じ犯人？」

瞳が大声を出し、亜麻音の頬が震えた。

「それって、おかしくないか？」

江角が唇を歪めて反論した。

「だって、一橋さん殺しはフウジンブレードへの復讐の一環。吉崎さんと菊野さん殺しは復讐の妨害。方向性がまるで逆じゃないか」

予想していた反論だ。というか、絵麻自身が同じことを考えていたからこそ浮かんだ仮説だからだ。

「そう思ってた」絵麻は一度うなずき、すぐに首を振った。

「でも、本当にそうなのかな。アイスピックとペティナイフの違いはあっても、どちらもキッチンから持ち出したらしいんだよ」

話していくうちに、考えがまとまってきた。話を続ける。

「タイミングも、一橋さんは眠っていて、吉崎さんと菊野さんは起きていたらしいという違いはあるけど、みんなが自分の部屋にいたときに実行している。細かい違いはあっても、同じ行動を取っているように思えるんだけど」

ぬう、と江角が喉の奥で唸る。

「そもそも、一橋さん殺しは復讐の一貫だって言い出したのは吉崎さんだけど、その直前には、復讐の妨害じゃないかって言ってたじゃない。吉崎さんと菊野さん殺しも、復讐の妨害じゃないかって話になってる。どちらも復讐の妨害が狙いだっただのなら、同じ犯人だと考える方が、むしろ自然でしょう」

絵麻が話し終えると、また食堂が静かになった。しかし先ほどの途方に暮れた沈黙ではない。みんなの目の色が違う。真剣に考えているのだ。

「一理あるね」雨森が沈黙を破った。「一橋さん殺しを復讐の一環じゃなくて、復讐の妨害の一環と考<sup>す</sup>えても、筋は通る」

しかし次の瞬間には、難しい顔になった。

「でも、犯人の特定に役立つかは疑問だな。一橋さんは誰にでも殺せるとい<sup>う</sup>結論が、昨晚のうちに<sup>い</sup>ている。誰にでも殺せた事件が、三つ並んでいるだけだ」

それを言われると弱い。こっちだって、解決の目処<sup>めど</sup>が立って発言したわけじゃないからだ。ただ、直視すべき点が見つかっただけで、

雨森はわかっているようだ。大丈夫、というふう<sup>に</sup>手を振って、話を続けた。

「ただ、三つの事件を一人の犯人がやったことと仮定すると、考え直さなければならぬことがある。一橋さんが死んだときに、どう

して僕たちは妨害説を捨てたのか。それは復讐の妨害が目的ならば、  
どうして僕たちが笛木を殺すのを止めなかったのかという問いに答  
えが出なかったからだ」

「え、えっと」懸命に記憶を辿る。「笛木一人に恨みを持つてるのは  
一橋さんだけだから、筋が通らないって却下されたんだっけ」

「そう。でもさらに吉崎さんと菊野さんが殺されてしまった。笛木  
が死んだ後に、復讐者を三人も減らしたことになる。復讐の妨害が  
動機という可能性が高まったし、笛木を殺した後に妨害を始めた理  
由も、想像できる」

江角がごくりと唾を飲み込んだ。

「犯人は、笛木にだけ、死んでほしかった……？」

「バカな」瞳が吐き捨てた。「思い出してよ。ここにいる仲間は、何  
のために集まったの？ フウジンブレードに復讐するためじゃない。  
それなのに西山も中道も殺さずに、笛木だけで満足するっていう  
の？」

「だから、その前提が違ってるかもしれないって話じゃないの」

沙月が冷たく指摘した。「犯人の狙いはフウジンブレードじゃなく  
て、はじめから笛木一人だったとしたら、筋が通る。そういうこと  
でしょ」

「じゃ、じゃあ」江角がつかえながら言う。「犯人は笛木を殺すた

めに、俺たちを利用したっていうのか？」

「妨害を深掘りしたら、そんなことも考えられるってことね。でも

――」

沙月の言葉は、あくまで冷やかだった。「思い出してみて。誰かがわたしたちの復讐心を利用して笛木を殺そうとした。もしそれが本当なら、おかしいことにならない？　だって、わたしたちの復讐心を殺人にまで昇華しょうかさせたのは、吉崎さんだよ」

まるで電撃を受けたように、亜麻音の全身が震えた。

「吉崎さんが、みなさんを利用したっていうんですか……」

泥が煮えたぎるような声だった。ばん、とテーブルを両手で叩く。

「吉崎さんは、困っている皆さんに手を差し伸べたんですよ！　実

際に、自ら手を汚して笛木を手にかきました。それなのに、吉崎さ

んを悪者にするんですか？　この恩知らずっ！」

最後は絶叫だった。ぜえぜえと息を切らす。

怒鳴どなられた方は、まるで堪こたえていないようだった。むしろ創った

ような笑顔を雨麻音に向けた。

「あらら。わたしは、それじゃおかしなことになるって言ったんだ

よ。だって、その吉崎さんも殺されちゃったじゃないの。絵麻さん

の言うとおおり一橋さんと吉崎さんを殺したのが同一人物だったら、

めちやくちや矛盾むじゆんするじゃない」

亜麻音が目を見開いた。再反論できず、口をばくばくさせるだけだった。しかし江角が口を挟んできた。

「いや。一橋さん殺しで吉崎さんの狙いに勘づいた人間が、自衛のために吉崎さんを殺したのかもしれない」

ぶん、と音を立てて亜麻音が江角に顔を向ける。睨みつけた。

「うーん」雨森が意図的にのんびりした声を出した。頭を掻く。

「ちよつと考えにくいかな。確かに、僕たちに復讐計画を持ちかけたのは、吉崎さんだ。でも、僕たちを利用して笛木を殺そうとしたというのは、違うと思う。だって、吉崎さんは僕たちの協力なんて必要なかったんだから。一橋さんを連れてきたのは吉崎さんだ。吉崎さんと一橋さんの二人がいれば、今回の笛木殺しに関しては、それで足りる。僕たちは要らない」

江角と亜麻音が同時に雨森を見た。どちらも、うまく感情が顔に出せていないようだ。中途半端に歪んでいる。

「それに、誰かが吉崎さんの企みを防ぐために殺したというのも違う。それなら、菊野さんが殺されるはずがない」

「そうだね」沙月が両手を頭の後ろで組んだ。「やっぱり、吉崎さんは関係ないか」

「一橋さん殺しの犯人である可能性は、まだ残ってるけどね」

やや落ち着きを取り戻した江角が腕組みをする。



「すると、笛木一人が標的だったってのも間違いなのか」

雨森が顔をしかめた。

「完全に否定されたわけじゃないけど、僕は可能性が低いと思って  
る。犯人に笛木と個人的なつながりがあったって特別恨んでいるとか、  
笛木が死ぬと利益を得るとか、そんな事情があるのかもしれないけ  
どね」

瞳が嫌な顔をした。

「利益なんて、そんなこと、あるわけないじゃない。それどころか、  
雨森さんたち原告は、笛木が死んじゃったから、裁判で賠償金をも  
らえなくなっちゃうんじゃないの。重要な証人の笛木が、法定で証  
言できなくなったんだから」

「まあね」雨森は素直に認めた。「僕たちは賠償金を捨てて、復讐を  
選んだ」

「笛木にとって幸か不幸かわからないけど」

沙月が指摘して、瞳が眉間にしわを寄せた。「どういう意味？」

「裁判は、笛木にとっても運命の分かれ道だったってこと。フウジ  
ンW P 1はヒット商品で、笛木はその開発責任者。でも不具合を指  
摘されて、裁判沙汰ざたになってる。裁判に勝てば、ヒットの生みの親  
として、さらなる出世が期待できる。でも負けたら、戦犯として処  
分される。裁判の結果が出るまでに死んだのは、笛木にとっていい

「何か悪いことか、わからない」

「確かに」千里が納得顔をする。「中道や西山にとっては、笛木の死はもっけの幸いかもね。笛木が裁判で検察官に攻められておかしな証言をしたら、裁判に負けるかもしれない。わたしたちは笛木の口封じに荷担したと、いえなくもない」

「だから、よしてよ」

瞳が仏頂面になった。「どのみち二人ともわたしたちが殺すんだから、もっけの幸いもないでしょ」

「そりやそうだ」

「とにかく」瞳が立ち上がった。「お腹が空いた」

反射的に掛け時計を見る。午後二時を過ぎていた。自分の胃に意識を向けると、確かに空腹を感じていた。

「わたしは、ご飯を食べさせてもらおうよ」

亜麻音を見て言った。亜麻音も先ほどの激情は収まったようだ。

つれない調子で「どうぞ」と答える。

「じゃあ、作ろうか」

千里が腰を浮かせかけた。しかし瞳が止めた。

「いいよ。亜麻音さんの意見だと、包丁は出さない方がいいそうだから。カップ麺を買ってあるから、それで十分」

返事を聞かずに、キッチンに入る。数分したら、カップうどんの

器を両手で持って出てきた。フタの上に割り箸を載せている。

「自分の部屋で食べるね。誰かさんは、わたしたちがお昼ご飯を食べるのが、お気に召さないようだから」

瞳らしくない嫌みだ。亜麻音が目を剥いたが、口に出しては何も言わなかった。

瞳が食堂を出ていった。残された面々——亜麻音を除いて——が顔を見合わせた。

「どうする？」雨森が訊いた。彼らしくなく、本当に困ってしまったようだ。

「俺も、カップ麺にしようかな」江角が答える。「瞳さんのうどんの匂いで、食欲に火がついた」

立ち上がってキッチンに向かう。

「せっかくだから、人数分お湯を沸かしてくれないか」

雨森が背中に向かって声をかけた。江角は振り向かず片手を挙げた。「了解」

しばらく待っていたら、キッチンから江角の声が聞こえた。「沸いたぞ」

「ありがとう」

雨森が立ち上がる。沙月と千里、それから絵麻もキッチンに向かう。亜麻音は座ったままだった。

レジ袋には、カップ麺が何種類も入っていた。江角は言葉どおり、カップうどんの包装を剥いていた。自分はどれにしよう。大盛りは吉崎と菊野が選んだものだ。自分はそれほど食べられないから、普通の縦型のものを選んだ。順番にヤカンから湯を注いだ。スマートフォンを三分に設定して、キッチンを出る。

「ついでに、煙草を吸ってくる」

言いながら、江角がすたすたと食堂を出た。雨森はいったん足を止めて宙を睨んだ。

「僕たちも、自分の部屋で食べようか」

そう言って、絵麻たちをうながした。言われなくても、瞳と江角が流れを作ってしまった。なんとなく、自分たちも部屋に戻る雰囲気になっている。沙月が食堂を出て、千里も続いた。雨森はまだ動かなかった。

「亜麻音さん」話しかけた。亜麻音は返事をしない。雨森はかまわず話を続けた。

「君は、もう少し落ち着きを取り戻す必要がある。吉崎さんを殺した犯人を捜すのはいい。でも今の君は、冷静さを失っている。さっきだって、沙月さんは吉崎さんが犯人というのはおかしいと言ったのに、君は犯人扱いされたと思って激高した。あれじゃあ、話し合いができない。僕たちはご飯を食べて休憩してから戻る。その間

に、気分を切り替えてくれ。なんなら、酒を飲んでもいい。戻ってきたら、話を再開しよう」

亜麻音は答えなかった。雨森は期待していなかったようだ。気にすることもなく「じゃあ」と言って食堂を出た。

「大丈夫かな」

並んで廊下を歩きながら、絵麻は訊いた。雨森はカップに視線を落としたまま答える。

「大丈夫じゃないかな。あの子は、僕たち全員を疑っている。いわば敵陣に入った意識があるだろうから、ぴりぴりしていただだけだよ」

どちらかといえば無責任に聞こえるコメントだった。とはいえ、反対する理由もない。少なくとも、雨森が亜麻音を疑っていないことはよくわかった。同感だ。あの亜麻音が、あれほど心酔していた吉崎を殺害するとは思えない。カップからスープをこぼさないよう、注意して階段を上った。

「じゃあ、後で」

「うん」

集合時刻は特に決めなかった。まあいいだろう。左手にカップを持ったまま、右手でドアの鍵を開ける。身体でドアを押して中に入り、真っ先にチェーンロックをかけた。

まるで待っていたかのように、スマートフォンのアラームが鳴った。三分間経ったのだ。

\* \* \*

スープをすっかり飲んでしまうと、瞳は大きく息をついた。客室に備え付けてあったティーセットで、ティーバッグのお茶を淹いれて飲む。

腹は満ちたけれど、気持ちはまだ落ち着かなかった。

大丈夫だ。落ち着け。

自分に言い聞かせる。あんな話の展開になったのは、仕方ないことだ。雨森だって江角だって千里だって、自分に聴かせるために言ったわけじゃない。

バッグに手を伸ばして、中から財布を取る。開いて、自動車運転免許証を出した。免許証には、写真と氏名が書いてある。写真はもちろん自分のものだ。そして氏名の欄には「西山瞳にしやま」と書かれてあった。

奥本おくもとは旧姓だ。被害者の会では、ずっと旧姓を名乗ってきた。あたりまえだ。自分が西山専務の妻と知られたら、確実にスパイ扱いされる。

夫がフウジンブレードを担当していたため、鬱状態に陥って会社を辞めざるを得なくなった——瞳は、被害者の会ではそう自己紹介した。フウジンブレードのひどさをよく知る被害者の会では、瞳の自己申告は抵抗なく受け入れられた。それも当然のことだと。だから自分の身分を疑われたことなど、一度もなかった。

嘘をついたつもりもなかった。夫の立場を正しく説明したわけではなかったけれど、フウジンブレードのせいで、自分は夫を失ったも同然だからだ。

離婚したわけではない。でも、心はとっくの昔に離れていた。

結婚したときには、西山は別の会社に勤めていた。中堅の電子機器メーカーで、堅実に働いていた。しかし上司との関係が悪くなって、逃げるようにフウジンブレードに転職した。そこで馬車馬のように働かされ、次第に一緒にいる時間が減っていった。

そこで潰されてしまわなかったのは、夫を褒めてよかったのかもしれない。ひどい会社に水が合ったのか、西山はフウジンブレード内でどんどん出世していった。そして取締役になり、専務にまでなった。勝手に都心にマンションを買い、女性社員を愛人にして住ませた。必然的に、家にはほとんど寄りつかなくなった。

——あれは夫ではない。

預金通帳の莫大な残高を眺めながら、瞳は思った。夫はフウジン

ブレードで過労死したのだ。今いるのは、抜け殻に悪魔が宿って、生きていくふうを装っているだけなのだ。そして、夫のふりをし、世間に害悪を流し続けている。止めなければ。西山を名乗る悪魔を退治してしまわなければ。

だから、仲間たちと一緒に夫を殺害することに、何のためらいもなかった。その意味では自分は真の仲間であり、裏切り者ではない。でも、正体がばれたら、みんなはどう考えるのか。

——笛木が死ぬと利益を得る。

——わたしたちは、笛木の口封じに荷担した。

雨森と千里の声が甦る。まるで、自分たちが西山に荷担してしまったかのような発言だった。

それどころではない。仮に笛木が今以上出世すると、次は取締役だ。専務である西山と権力闘争を繰り広げることになる。瞳は夫を支援するために笛木を殺したと受け取られかねない。

冗談じゃない。自分は夫を殺すのだ。夫に味方するために、仲間を装って潜入したわけじゃない。

動揺を<sup>けど</sup>気取られなくなかった。だから亜麻音に悪役になってもらって、一人で部屋に戻った。落ち着くまでは、部屋にしよう。

みんなはどうしているだろう。食堂で昼食を<sup>と</sup>摂っているのか。それとも自分のように部屋に戻ったのか。



もし全員が食堂に残っていると考えると、それはそれで怖い。欠席裁判で、自分が犯人にされてしまうかもしれない。もし誰かが自分の正体に気づいていたら、それはあり得ない話ではないのだ。

でも、まだ戻れない。落ち着いてみんなの顔を見る精神状態でない。もつと時間が必要だ。

突然、ノックの音がした。

心臓が跳ねた。返事ができない。しかしノックは一度だけだった。もし自分を心配してノックしたのなら、連打しているはずだ。吉崎や菊野のときのように。

立ち上がってドアに向かう。ドアスコープから廊下の様子を窺ううかがが、誰もいない。

気のせいだったか？

そう思い込もうとしたけれど、ノックの音は間違いなく響いた。どういうことだと思ったら、足元に視線が向いた。ドアの隙間から、白いものが差し込まれていたのだ。紙だ。

屈んで拾う。A4サイズのコピー用紙だ。この保養所にたくさんあるものだ。コピー用紙には、汚きたない字が躍っていた。

『にしまみひとみさま あなたのしょうたいがわかりました さっききくのさんのへやでみつめました きくのさんのところにきてください しょうこをおみせします』

全身に悪寒おかんが走った。あなたの正体がわかりました。そのとおりだろう。西山瞳と、本名を知っているのだから。

でも、菊野の部屋で見つけたって？ 菊野が自分の素性すじょうを知っていたというのか。

仲間たちは、瞳が色々と菊野を気にかけていたから、息子のよう  
に思っていると受け取っているようだ。実際、復讐の打ち合わせの  
後、何度も二人で食事に行く光景を見られている。

そんな気持ちもなくはないけれど、こっちだつて夫と関係をもた  
なくなつて、ずいぶん経つ。自分になつている菊野に、男を感じ  
なかつたわけではない。いずれはそういう関係になつてしまう予感  
もしていた。

だから菊野すきに隙を見せたことがあつたかもしれない。たとえば、  
二人で食事をしたとき、瞳が食事代を持ったことがあつた。支払の  
とき、目の前で財布を出した。その際、運転免許証が目に触れてし  
まつたとか。

菊野が自分を疑っている素振りそぶりを見せたことはない。でも、ちょ  
っとした仕草しぐさを見抜くほど、彼と近しかったわけではない。

鼓動が早まっていく。誰だ。このメモを差し入れたのは誰だ。三  
人の仲間を殺害した奴か？

そうかもしれない。けれど、行かないという選択肢はない。もし

正体をばらされてしまったら、一気に犯人にされてしまうかもしれないのだ。いや、真犯人ならば、間違いなく、そうする。

瞳は周囲を見回した。護身用の武器になるものはないか。倒せるような威力は必要ない。相手が襲いかかってきたときに、少しでも時間稼ぎができればいい。一瞬の間さえできれば、大声を出して助けを呼べる。

しかし保養所の客室には、武器になりそうな物は置いていない。仕方がないから、非常用の懐中電灯を持った。あまり頼りにならないけれど、鈍器の代わりくらいにはなる。

ドアを開けて、そっと廊下に出る。廊下はしんとしていた。階下から話し声も聞こえない。高鳴る心臓を抑えながら、九号室に向かう。一度深呼吸して、そっとノックした。

内側からドアノブが回され、ドアが開かれた。

〈つづく〉